**一戸　呉六 （いちのへ・ごろく）**

**１、プロフィール**

詩人。昭和６年頃から詩作活動を始め、第２次「北」「府」第３次「北」等を創刊、県詩壇の発展に寄与した。その詩は風土に根ざした津軽のエスプリを表現している。

＜生没＞

1907（明治40）年５月18日 ～ 1997（平成９）年７月21日

＜代表作＞

詩集『津軽の霊歌』

＜青森との関わり＞

北津軽郡三好村（現五所川原市）に生まれる。津軽に居住し、昭和から平成の長きにかけて、詩作活動をした。

**２、作家解説**

　詩人。筆名一戸洋一。明治40年５月北津軽郡三好村藻川（現五所川原市）に生まれる。昭和２年３月、青森県立商業学校を卒業。帰郷し家業の商業に従事する。昭和６年後半、「サンデー東奥」に詩を発表、新進詩人としてのスタートをきる。７年８月詩誌「青嵐」を創刊。第２次「北」の同人となり、８年詩誌「北」「椎の木」等に詩を発表。４月、「北」終刊後、12月、植木曜介・船水清と詩誌「府」を創刊。９年、「東奥日報」「府」などに詩を発表。10年５月、青森県販売購買利用組合連合会に勤務、青森市に移住。12月、児島次郎・西本淳一等と詩誌「夷」創刊。14年６月、中国大連市の満州輸入株式会社に勤務。詩誌「鵲」「満州詩人」「新文圏」に詩を発表。20年５月、大連市で臨時召集により歩兵第266連隊に入隊。22年１月、佐世保港上陸復員する。４月、青森県職員となる。11月、一戸謙三・高木恭造と北詩人会を結成し、発起人となり、機関紙として月刊「北リーフレット」(12月)、季刊「北」（23年６月）創刊。27年以降、県広報誌「県政の歩み」、同人誌「奔流」「羊眼」等に作品を発表。40年８月、第１詩集『津軽の神々』(津軽書房)を刊行。41年６月、青森県詩人協会会長に就任。44～45年にかけて「月刊あおもり」に作品を発表。46年８月青森県詩人協会会長辞任。11月第２詩集『津軽の霊歌』（青森書房）を刊行。49年11月、県文化賞を受賞。53年１月、県褒賞を受賞。３月、第３詩集『津軽の秩序』(青森書房)を刊行。これ以降、『現代詩集成』「年刊詩集（青森県詩人連盟刊）」等に作品を発表。63年10月、第４詩集『津軽の愁訴』（東京出版）を刊行。平成５年12月、第５詩集『津軽の悠妙』('水星社)を刊行。９年７月、弘前市において逝去。一戸は『津軽の神々』のあとがきに「私は永遠にひとりの津軽人である。また、私の運命も、つがるの神々に大きく強く支配されてゐるのだ」と記している。

**３、資料紹介**

〇『津軽の霊歌』

図書

1971(昭和46)年11月３日

184ｍｍ×215ｍｍ

第２詩集。昭和46年11月３日発行。限定250部。発行所青森書房。挿絵福島常作。内容 は、戦前の12篇、戦後昭和22年～45年までの自選の誌30篇を収録。詩人一戸の詩のスタイル・詩精神の全貌を概観できる。